



文楽座人形浄瑠璃

文楽座 しせつ

純真の美と氣品を増す

クラブ白粉

日ヤケアレ止に一番よい

クラブ美身クリーム

文 樂 年 中 行 事

文
百
又
の
興
行

八月興行 二日目の豫定時間割

前 夏 祭 浪 花 鑑

三姉内の段 (午後五時開幕の豫定)
長町裏の段 (六時開幕の豫定)

御食事時間 約二十分間の豫定

中 菅原傳授 手習鑑

松王首實様の段 (七時開幕の豫定)

御食事時間 約二十分間の豫定

次 卅三間堂棟由來

平太郎住家の段 (六時十分開幕の豫定)

御食事時間 約十五分間の豫定

切 伊達娘戀緋鹿子

次の見櫓の段 (十時五分開幕の豫定)

(打出) 十時二十分の豫定

(舞臺裝置 松田種次)





出語りの始

文樂今昔譚より

竹田近江 出雲との提携

元祿が終つて世は寶永元年の秋と移つていつた。こゝに義太夫生涯の上に大きな謎が投ぜられたのである。凡そ偉人とか、大藝術家などには往々にして、普通人の知るこゝの出来ない心境があるものである。これもその一つには相違ない。

竹本筑後縁こゝ病氣により竹本座の座本を退く。

さあ解らない、新派淨瑠璃義太夫節なる一流を興し、生涯をこれに打込んである筈の義太夫、十八年間の苦節を忍んで、とても常人の及びもつかない堅忍持久を續け、ちつとやそつとの辛抱でなかつた辛抱をして、悪戦苦闘をして来た義太夫、而かも近松門左衛門下阪によつて、やうやく『曾根崎心中』なる好狂言を得て

藝術的にも經濟的にも立派に成功した、その一年を出ずして、些々たる病氣ぐらいて竹本座の座本を退くといふのだから、こゝはいよいよ解らない、とても想像が出来ない、藝術家のみに許される、何か特異な心持が突如として義太夫に起つて来たのに違ひない。かうして義太夫は、ひざりさつと舞臺生活から退いて行つてしまひ、くるく／＼と頭を剃髮して、道喜といふ法號に改め、拍手扇を持つた手に珠數をつまぐり、床本を經卷に代へて、朝夕を御寺詣でに過すといふ、たいへんな變りやうである。驚いたのは門弟達である。義太夫節は茲に又新しい境地を拓いて、ます／＼世間に認められやうとしてゐる大事の瀬戸際、頭領に出て

しまわられては、杖に懸れた盲目同然、これでは、なんにもかもまる潰れた。門弟達は當然これを黙つて見てゐるわけには行かない、さつそくに、一同はこぞつて義太夫の面前へ出て、涙をふるつて復座を嘆願した、門弟達が繰々述べるこゝの一言一句、もさより義太夫節の前途を思ふての上からであり、師弟の情まことに濃かに熱誠おのづから面にあふるゝばかりである。これを聞いてゐる義太夫さて、もさより人一倍血も涙もある人だ、門出が訴ふるこゝの至情の言葉には動かされぬわけには行かなかつた。さうして己が義太夫節の百年の後を考ふる時、どうも今度の行動は輕卒であつたやうに感じたのである。實を云ふと、義太夫の腹の底には、例の十八年間の忍苦の生活を追懐するも今が舞臺の引き潮時ださ考へたのもあつたが、更に又考へ直して見るに、それは一身の安樂、老後の安逸のみ目がけた功利的な考へであつたと覺つた、義太夫節といふ大局から觀れば忠實である、多くの門弟から眺めればいかに無慈悲な譚であつた。

自分は藝道の爲に身命を捧げてゐる筈であつた、假りにも自分勝手に行ひは許されない、かう氣がついて門

弟達の前に、生涯を新道の爲に盡すことを誓つて、再び舞臺人として復活したのであつた。これで義太夫節は危く中絶するところをまぬがれたわけである。

義太夫が心機一轉したその時。かれて、からくりや水からくりの發明で成功した竹田近江がその子の出雲に財産を頒けてやつて、人形淨瑠璃の經營をやつて見やうといふ考へを持つてゐた、そこで義太夫に説いた。義太夫は悦んで、一番重荷に思ふて居た竹本座經營上の一切物質的責任を彼に譲つて、ヤレ／＼と安堵した以來座本はいよいよ竹本出雲となり、義太夫はこれだ藝道一方に精進出来ることゝなつた。

淨瑠璃史上に記念すべき組織改革後の竹本座の第一回興行が、いよいよ開場されることゝなつた。時は寶永二年三月二日初日(異説十一月)近松門左衛門作『用明天皇職人鑑』を上演。此時あらためて竹本座から發表してゐる繪本淨瑠璃『用明天皇』の表紙見返しの繪にある、幹部連名を見るに、座本竹田出雲太夫竹本筑後縁、三味線竹澤權右衛門、おやま形辰松八郎兵衛作者近松門左衛門として畫像と名とが記されてゐる。

近松が大阪に永住するやうになり、今までの囑託の作者から、判然と座附作者として招聘されたのは此時からであらうと思われる。名にし負ふ豪華をもつて鳴つてゐたからくり成金の竹田近江が後見となつて、名目上の新座主出雲を督して經營案を立て、人形の作り替へ、衣裳の新調、道具の改造、すべては一變して華美に成り、舞臺面の轉換には得意のからくり細工を應用し、斬新な趣向を創め出したのである。従つて在來の竹本座の執つた藝術本位の方針は第二義となり、影しく興行的色彩が濃厚になつて來たのだが、義太夫は何んな顔をしたらうか。おそらく微苦笑を洩らしてゐた事と思はれる。さて新座主は作者、太夫三味線、人形に當代第一流を網羅したその上に、嘗て豊竹座を創立した若太夫がその當時休演してゐたので臨時應援としてこれも一座に加へるこゝになり思ひきり花やかに蓋を開けたが爲に、これまた非常な大當り大好評であつた。近松はこの記念興行を祝福する爲に、狂言中に竹田家の意を体して記念文字を入れてゐる。第一段内裏の一節に、勅詔あつて、諸國の職人に官位を與へ、官名受領の詔許あるくだりの文中

此時より諸職人、今も國名を許されて時に近江や世に出雲、そのよるづ代も竹の名の、筑後の後の末長き御代に住む身ぞ豊かなる。

義太夫はまた、この興行に始めて舞臺に顔を現はして演ずることを試みてゐる。さうして第三段目の「鐘入りの段」の景事を出語りして、見物を喜ばせた。たゞに見物を喜ばせたばかりでなく、これがそも／＼太夫出語りの濫觴なのだから、すこし當時の實際を述べて置かう。戯曲や歌舞の類に謠曲道成寺を轉用した所謂「道成寺物」と稱するものは、可なり澤山にあるが、この鐘入りの段も、つまりはそれで頗る奇抜な趣向に劇化してゐる點、殊にその構造の辭を抜いて大まかな點から見て謠曲以上かも知れない。謠曲では貴族的優美な白拍手であるシテ女を極めて民衆的な焚飯女に變へて登場させ「これは比國の傍らに、下司奉公の勤めをいたす飯焚きの女にて候」と語らせ、先づ見物の意表に出で耳目を驚かしてゐる。これは單に奇抜な趣向をしたといふばかりでなく、町人の都さしての大坂の土地にふさはしく、作者が平民化した一つの見識でもある而かも此一段の文章は、作者獨特の景情備はつた魔文

で、繪圖自在の趣きがある。こゝを演者義太夫は苦心の節調で語りこなしただから、この一帯が當興行中隨一の呼び物になつたのは當然である。日本で始めて出來た遊君の元祖、播州室の津の室君が、假りに飯焚きの女中に姿をやつして、その夫が世を忍ぶ播州高砂尾上の濱へ訪づれてくる。そこには海中から現はれた天竺の祇園精舎の名鐘があつて鐘供養が行はれてゐる女人の出入りは禁制といふこゝになつてゐるが室君はある誤解から嫉妬に燃へ立ち心も狂亂して、鐘供養の庭へ侵入する。そして鐘の中へ姿を隠す。この大騒動に。豊國禪師が弟子を引連れて出て大祈禱をするこゝ、功驗忽ち現はれて鐘は自づと躍つて鐘は鐘樓へ引き上げられる。「アレ見よ蛇体は顯はれたり」でいよ／＼一日中の大評判である「鐘入りの段」が始まるのである當時の舞臺の有様をいふと、正面に翠簾が吊るされてゐて、太夫三味線彈き等はその内部で勤め、人形遣ひはその前面で技藝を演じたものである。舞臺の全部を今日の文樂座で見ると總て人形の領分に占有させ太夫三味線の席が側面に遷された形式は義太夫や近松歿後の變革である。この變革がやがて操淨瑠璃が歌舞

伎に壓倒されて行つた變轉を物語るものだと云つてもよい。

さて此時、この晴れの記念興行を意義あらしめる爲め義太夫はいつも翠簾の内へ語る例を破つて、それを高く掲げさせ、顔を見物に現はして語る例を始めた、この新しい形式を出語りと稱したのである。いよ／＼鐘入りの段となるこゝ、正面の簾がさ／＼と上る、そこにはシテ、竹本筑後掾が見臺を控へ、鱗形の模様のある袴を着て(室君の蛇身に因んで)一刀を佩し、扇子を斜に構へて座つてゐる。ワキには竹本難波、三味線の竹澤權右衛門が九枚笹の紋模様袴に三味線を抱へてズラリと居並ぶ。かういふ舞臺の光景に始めて接した見物はドツとばかりに喝采した。

その前では、これもおやま人形の辰松八郎兵衛が全身を現はして、曾根崎心中で試みた出遣ひの形式で、思ふ存分室君の蛇体を操つて満場を酔はしめた。なほ又義太夫はその冒頭の名文

涙川戀の氷に閉ぢられて、身を切り碎く思ひより、浮き川竹の憂き節を、せめて聞もる月だにも、あはれ枕に訪ひも來ず、我れ一人寢となりたるぞや。ひさり立

つたる一こ、薄妬みの露の重たさま。特に巧い節調で語り生かしたものと見へて、市中の一口淨瑠璃にも口ずさまれたといふことである。

なほもう一つこの淨瑠璃で、義大夫の見識といふものが現はれて感銘のふかい事は、本文のうち、廓の遊女の年中行事、紋日の事を叙べたくだり

人のよるこぶ日云へば、我はなげきのます鏡に節付けられた『愁ひの冷泉節(れいぜんぶし)』についてある。

本来冷泉節といふものは、古淨瑠璃『十二段』にある『さてもやさしい冷泉』の句につけられた華やかに艶麗な節廻しを云つたもので(冷泉とは三河の國矢矧の長者の娘淨瑠璃姫に仕へた侍女の名である)あるが、義大夫はわざとこれを愁ひの文章に使用したのである。

かうした試みは、古淨瑠璃の人から見るに、破格の振舞、異端の業で、果せるかな批難の矢を浴せられたが、義大夫は自己の信念の上に試みたことだからピクさもしない、歡樂の極みと哀傷の極みはわづかに薄紙一枚を隔てた差異に過ぎない、廓の女の愁ひ華やかなうちに悲しみを表はさればならない、體麗なうちにも何處

か哀愁を帯びた『冷泉節』こそ恰好の節調であること信じたからである。これは勿論口で語るさいふより心持で情を活かして語らねばならぬだけに、古來至難の節調として傳へられてゐる。されば二世竹本義大夫(政大夫)もその門下に説いて『これは愁ひの冷泉なり、常の冷泉に語れば、人形いそ／＼として嬉しさうに躍るべし、文句に氣をつけるべし』と訓へてゐるほどである。



三婦内の段

釣舟の三婦	豊竹和泉大夫
九郎兵衛	竹本長尾大夫
一寸徳兵衛	豊竹富太夫
おたつ	豊竹つばめ太夫
女房おつ	竹本源路太夫
磯之	竹本さの太夫
琴平	竹本長子太夫
義平	豊竹千駒太夫
こつばの權	竹本陸路太夫
なまこの八	竹本龜久太夫
	竹澤團六

人形

釣舟の三婦 桐竹政龜

前 夏祭浪花鑑

三婦内の段より

長町裏の段まで

この淨瑠璃は延享二年七月竹本座に上演されたもので三婦内の段は六段目で大体の筋合は元禄十一年歌舞伎に演じられた『宿無團七』を藍本としたものであります。泉州濱田の家中玉島兵大夫の息子磯之丞が乳守の遊女琴浦に夢中になつて勸當になり團七が世話をする。團七は兵大夫と同家中の大島佐賀右衛門の家來に傷を負はせた爲めに相手双共入牢の身となつたのを兵大夫の扱ひで出牢した恩義からであります。磯之丞は團七の世話で道具屋へ手代に住込むこ

主人の風が、懸に落ち、歌頭、娘、お節、お市、お殺、團七の女房お梶の父、義平次の騙りから起る五十兩の引算等の爲めに大阪にも居られなくなり死なうとしたのを釣舟の三婦に助けられ其家に匿まはれてゐる處へ一寸徳兵衛の女房お辰が訪れて來たので三婦は之に頼んで備中玉島へ落してやり、琴浦も後から遣らふこしてゐるに、豫て琴浦に懸慕してゐる大島佐賀右衛門に頼まれて團七の舅、義平次が團七の名を騙つて琴浦を奪ひ取ります。後で之を知つた團七は舅の後を追つて取り戻そうと馳け出します。これまでが三婦内の段で、長町裏へ追ひ付いた團七がそこで欺して義平次から琴浦の乗つてゐる駕を取り戻し其金の経緯から遂に義平次を殺す

團七九郎兵衛 吉田榮三
一寸徳兵衛 桐竹門造
女房お辰 桐竹紋十郎
女房お次 吉田小兵吉
玉島磯之丞 吉田文作
女郎琴浦 吉田光之助
男義平次 吉田玉松
こつげの権 吉田市松
なまこの八 吉田市松

長町裏の段

九郎兵衛 豊竹つげめ太夫
義平次 竹本鏡太夫
野澤勝市

人形

團七九郎兵衛 吉田榮三
男義平次 吉田玉松
踊子大ぜい

こいふのが長町裏の段になつてゐます。世話物にて九段續きといふ長ものはこれが始めで、また人形に帷子衣裳を用ひたのもこれも嚙矢であります。

(床本) 三婦内の段

鹿ナドリ 賑はしき、浪花高津の夏神樂練り込む振り込む擔ひ込む、てうさようさの伊達提燈、門のそろへは地下町の、しるしを見世に伊豫簾、並ぶ家居の其中に、釣船の三婦の家。客は内證預りの、乳守の太夫琴浦と結び合ふたる磯之丞。見世を揚屋の祭見に、口説しかけて拗れ合ふて、ほむらの煙管打た、き、煙くらべのびんしやんば、火皿も湯になるばかりなり。三婦の女房は料理拵へ、火鉢に掛けて焼物を、燗く片手に、コ

續憎く、せり合ふ中へ主の三婦數珠爪繰つて門口より。詞女房ども今戻つた。祭の料理出来であるかこ内入まきにおつぎもほれん。詞出てあるく、あつらへの鱈の焼物擲りたて汗にかは膾。ナツト夫で喰へるく。シテ道具屋の娘女は戻して来てか。ハテ人の大事の娘かごはかしたさいはれては、磯殿の男も立たぬ。首纏つた傳八めに何もかも負ふせ、金の事もさらりさ濟み、仲買の彌市を殺した事は、彼の書置してやつたと思ふたわ、いやな風説がある。お二人も聞かしやませ。其書置の手が傳八の手でないこ一門どもがいひ出だし、御詮議を願ふその噂スリヤ磯之丞様を大阪の地には置かれまいと、九郎兵衛もいふ。おれも

思ふ。マア當分立退かす相談こいふて、あてごなしにやらせまい、よつばごなげんびき、マア端近へ出て人に顔見せるもわるい。殊に琴浦殿は、目かける奴のある身の上。女房どもも女房共、なせ表へ出しまするぞと、叱りまはせば、ソレ見さんせの、榮耀らしい愷氣所か、事によつたら二年三年、わかれくごさるもしれぬ、暇乞さ仲直りの汗を一度にかいておかせ。うちんせすま琴浦様、つれまして去かんとせと、粹な女房の挨拶も、よい折れ口と。コレ磯様、いふ事かたんさある、サアござんせご手を取れば、ふいと振り切り。不行儀せまい、詞三婦が屹ち見てゐるを、おどけをほに二人連手を引き合ふて入りける。ドリ

レ琴浦さん。詞まうよい加減に仲直つたらよかるうがの、道具屋の娘お中殿ごやらの、三婦殿が送つて行たも、愷氣しんきな顔がいやさに、夫に何ぞやふしたやうに、お前も粹のやうにもない。男に勤奉公をさしたと思ふたがよいわいなと、挨拶すれば。詞ア、おつぎさんのいばえず事はいの。お中ごのさ心中に出た溝七男仲直つたてて面白うもござんせぬ。じたい娘の有る内へ、奉公にやらんした、九郎兵衛様が聞えませぬアコリヤ九郎兵衛に恨み云ふ氣なら此清七男にいへ。三婦の世話してたもるのも、九郎兵衛の頼みから。サ其恩ある人を恨みさするはお前のわざ。いふなやい、据藤と河豚汁を食はねは男の内ではない。ソレ其口が

ヤ焼物を備立て、祭しんじよと立つ女房。表へ二十六七な所目馴れぬ笠の中、そこ爰かで見廻して、詞下り荷物の世話なさんす、三婦さまこいふお方は、爰らではないかへご問ふ門口より。爰でござんす、ごなたじや。私じや。私じはへ。チ、ようござつた、アリヤ徳兵衛のお内儀じや。是はしたり、サアマア此方へご挨拶を、馴染にして打上り。三婦様には先程九郎兵衛様でお目に掛り何かのお禮を申しましたわ、お前には始めて、私は備中の玉島にをりまする辰さ申して、徳兵衛女房でござんす。これはくよううらんしたなサ。アイマア配偶徳兵衛殿こは僅な科に國を立退かれまして、和泉まやりに居られましたを、皆さん方

が世話にして、暫く大阪の住居。生れ付もあらこましい喧嘩といへば一番おけ、はた刀さいたやうな人、定めて何かお世話もちこ、一禮いへばア他所がましい何のお禮。詞イヤもうあらこましいは何方もある事。手前の人も十五六年以前迄は、夫はく喧嘩好きでな、苟且にもちよつこ橋詰へ出て貰なむ毎日毎晩、夫も亦直れば直るもの、今では蟲も踏殺さぬ佛性。アレ彼のように片肢も數珠を離さず、腹の立つことおあれは念佛で消して參られます。嬬がいふ通り常住これじや。ハテナア夫は結構なこと、イヤお内儀、徳兵衛も同道で下られますか。サイナア女房の思ふやうにもない、聞いて下んせ。お風の告めも敢りて迎ひに来

か、面談すかたわけめと、此り飛ばされもちん。うぢん。徳兵衛女房聞告め。詞イヤ三婦様、無理に頼まれたうていふではないが、私其人預ればお前の男も立たぬは何うして、但し女でまさかの時役に立たぬと見すえてか、まんざらひぢりかすりなくふやうなアイ女子でもござんせぬ、一旦たのむのたのまれたといふたからは、三日でも預られれば私も立たぬぞへ。立て、下んせ親仁様、辛い女房の言葉の山椒、茶びん頭を動かす。詞イヤどういふても預けては此三婦も男も立たぬ、サア其立たぬ聞かう。いかさま夫には様子もあらう夫やマア何うして立ちませぬ。ホ立たぬといふ譯は内儀の顔に色氣もある故、徳兵衛も思はう

たを、ヤレ嬉しやといふ氣も無うてマア四五日も後から下り、先へ下れさびつしよなき。未練さうに付はつてもゐられず、是非なう先へ下りませ、話の中に三婦も女房、思ひ付いたる一つの頼み、云ひ出すしほに茶をさし出し。詞イヤ申しお辰様。なれくしいがお前へちこお頼み申したい事ござんす、何ぞ私に頼まれて下んすまいかござらさへば、立直つて襟かき合せ。詞玉島の田舎に住むでも一寸徳兵衛の女房でござんす。頼むとあれば一寸でも後へよらぬが夫のしにせ、引きはせまいマアいふて見さんせ。マア忝いお禮か申します。定めて徳兵衛さんの話で聞いてござんせう、和泉の國濱田の御家中、玉鳥兵太夫様といふお方

にも、三婦といふ者はよい年をして不遠慮な、身に火の付いたが切ないさて、若い女房に若い男を預けてやつたは聞えぬと、思ひはせまいが又思ふまいものでもない。あなちこなたに限つて爾うした事はあるまいけれど、分別の外といふことあるに依つて、又疑ふまいものでもないか。ないことじや。ないことじやに依つて、結局句が立てられぬ、腹立つまいぞや、いつそ此方の顔も歪んであるか半分削けても有つたら、徳兵衛も何とも思ふまい、又世間も濟む。俺や誓文コレ此數珠にかけ預けたい、此方の根性見据えに依つて、も萬々が一徳兵衛も立たぬ事出来るぞ、俺は勿論九郎兵衛まで、男も頼たる、こいふ事

の御子息磯之亟様といふが、様子あつて町奉公なされてござつた所に若氣の至りで人を、マア大阪に置かれぬ首尾。今も今こてかけさせます相談。此お方をどうぞマア、私の方へ預りましょ。アノ預つて下んすかそこを引かぬが一寸の女房、殊に其親御の兵太夫様へ付いてはちつこちにも由縁もあり、預つて連れまして歸りましょ。そんならさうして下さんせ、ア、落付いた落付いた。アエ呼びまして來ませうと、立つを釣船、コリヤ待て女房、詞女賢しうて牛賣れぬと、要らざる已も差配、頼んでよけりや俺も頼む。磯之亟殿をお辰殿へ預けては此三婦も顔が立たぬ。サア其所を外へ預けるが彼方のお爲。マアぬがす男の一分捨てます

はあるまいけれど、外といふ字で預けにくい。マアさう思ふて下されと事を分けたる一言に、連添ふ女房も理に服し、お辰はもこより言葉も出す、差俯伏してゐたりしが、何思ひけん立ち直り、火鉢にかけし鐵弓の、火になつたのをおつ取つて、我ご我手に我顔へ、べつたりあてる機金にうんこばかりに反りかへる。是は何故何事と、夫婦は周章抱きかへ、薬よ水よこ勢はれば、正氣付きしかむつこ碇き。詞なんぞ三婦様、此顔でも分別の外といふ字の色氣があらうかな。出來した。お内儀、磯之亟殿の事を頼みます。スリヤ預けて下さんすか。唐までなりと連立つて下され。アノ嬉しうござんす、之でわたしも立つた。磯之亟様の親御兵

大夫様は、備中の玉島が御生國、徳兵衛殿の爲にも、わしも爲にも親方筋、其御子息様を預からいで連合の男も立たず私も主へ立たぬに依つて、親のうみつけた満足な顔へ疵付けて預かる心、推量して下さんせと語るを聞いてお次も涙、三婦も涙の横手を打ち。詞ハテ徳兵衛は頼母しい女房を持つたなア。なぜ男には生れて来ぬぞ、可惜物を落して来た。ソレ女房共奥へ伴ひ磯殿にも引合せ備中へ下す心拵へ。お内儀、疵は痛みはしませぬか。何のいな我手でした事、チ、恥しい袖捲ふも。惜しや盛りを散らせし三婦が女房はいたはりて、一間へ、Mこそは連れて行く。早や暮近くなまなれの、立つるでもなし様に出る、男仲間の蹴れ

だされ、こつばの權なまこの八、獅子に雇はれ赤頭、せんまの形を其儘に、三婦殿内にか宿にかこ、つき聲やり聲にじり込む。詞ホコリヤ二人ながら祭の形、まだ仕廻すか、呑みに来たか。今看經しかけて數珠の手が放されぬ、そこらに樽であう一盃せい、南無阿彌陀、磨棚に喰かあうぞ、なむあみだ佛、夫を看ま口ではぶつ、つまぐる數珠を挨拶を、取混ぜ後生佛性。こなたは牛頭馬頭惡鬼株、膝打たいて。詞八よ親仁に今の言をかい。ハテぶつ、を聞いて居よりいひ出せ、コレ三婦殿、二人が連立つて来たはこなたに貰ふものが有つて来た。花が欲しい、花くだはれ、ヤア、何がじゃ、花をくれい。へエ扱は留守の

間に山車でも持つて来たな。チ、獅子持つて来て美しい花を見付けて置いた、さる侍に頼まれ其花を貰ひに来た。ナ八よ。それ、つひつかんで来て進せういふて、お侍を宮の内へ待たして置いた。前なら腕づくで貰ふけれど、白髪の生えた人をさうもなるまい。但しこみすつて見る氣か、金にでもする氣か、仕掛ける暗嘩を數珠でまぎらし。詞エ若い者、さいふ物は、づば、さたしなめ、わいらは住吉で始めてあふて夫からの出合。まう根性も直つたと思ふたが。フム其侍、さいふは大鳥佐智右衛門さいふわろであらうかな。マアそんな物。コリヤ去んで云はうには、琴浦には磯之丞さいふて歴きとした男がござるさ行んでいふ

てくれ、コナ親父は、おいらを子供のやうに思ふさうな。チ、俺の目からは蛙のやうに思ふ。ドリヤそんなら擲んで行のかさ、立上つて二人が奥を目懸げ駈入る所に、襖さつと押明け、脇差下げて三婦が女房。詞コレちの人、私や先きから聞いてゐたが、こな様もう堪忍かなるまいの、娘五六年願ふた後生を無にしていつそ切つてしまはざるまい。チそんな事もよござんしよ、お、あんまり夫は不便なこどももあり。イヤこんな時切らざ切るときもあるまい云ふに二人はうちんきよる、性根を据えて身を固め。面白く切られう、脛腰立たぬ老害切りはづさして臺座後光、仕舞ふてくれうミ兩方より、サア切れ、こせむみ立て、

入身になつて待ちかくれば、三婦はすつと立身になり、詞娘まう是非がない切つてしまを。ヤ夫は。イヤ俺が切るは此數珠さ、ふつ、り切つて後へ投げ。サア是からが元の釣船己等に及物が要らうかさ、はつしはつしと踏み倒し、尻引からげ。詞ドレ其脇差。ハテまう及物は要らぬでないか。イヤ此がらくためは爪にも立たぬ、根ざしの侍めをばらして仕舞ふ、男の丸腰も見苦しうさ、大だら腰にぶつこむ所を、こつこいさうはさ右左、掴み付く腕ぐつと捻上げ詞、嬪侍に逢ふて来う。チ、行てござんせさやる女房、行く男より氣の強さ、そま、押出し跡がつしやり。三婦は二人を引立て、宮の内へこつて行く。奥はしばこの別れぞと

琴浦に吞込ませ、酒酌みかはす折からに、表へ来るは九郎兵衛が、舅三河屋の義平次が、駕籠釣らして戸をこさ、誰じやさいふて明けに出る詞、ホ三婦殿の御内室、此中はおひませぬ、何時見ても健さうな、お前も達者で珍しい何と思ふて。サ年よるご子に使はれます、九郎兵衛がいふには、此中から悪者ごもに頼まれて琴浦殿を盗まんご念むける、定めて三婦も心遣ひ、四五日こちへ取込んでおいたら、燈臺元暗しと氣付くまい、女夫の衆の氣やすめに、迎ふて来いさいふて駕籠までおこしました。是までいかい世話を取繕へばナンノお禮に及ぶご。詞、今も今でいけずめがわつげさつて連合は其出入りいかれました、いかさま二三

日此家をあらけ、彼奴らに鼻明かすも魂膽。九郎兵衛様も其胸で、俄の迎ひでござんせう。舅御のお前に渡すはたしが、奥にじや呼んでまきせうと、つひ立ち入れて義平次は、駕籠の衆待つて貰はうと、門につべり人顔の、見えぬを首尾待ちあたり。奥は益ざり納め、件ひ出で、琴浦も、そんなら私も三姉様や、九郎兵衛様に諷いふて、後から行くが合點か。チそりや其時私が又迎ひに来るご辰も挨拶。磯之巫もももんに一時には目立つ故、猶以つてつれては行かれぬ、兎角彼の衆のいふ様に、有めて別れ女郎は駕籠、磯さお辰は船場へ、立出づれば、三姉が女房、詞義平次様渡したぞ、お二人様も御無事で、暇乞も挨拶も、庄

ひの思ひ暮過ぎて、又の便を松屋町南さ北へ引わかれ、足早にこそ歩み行く。宮には喧嘩／＼と騒ぐ中、若い者共聲々に、詞親父殿、まういよ、高が逃げる侍を相手にするは大人氣ない、マア去なれい戻られぬ徳兵衛九郎兵衛諸共に、三姉を宥め歸る店先。女房立つてコレ皆様。詞出入の濟口どうじや／＼、ごちのむ退けでござんせぬか。年寄だけで氣遣ひなさ、問へば徳兵衛いかないか。詞昔に變らぬ達者なうち、八ミ權さは蓮池へ、何の苦もなくごんぶりいせ侍はふみつけた／＼。チそんなら入らんせ、祝うてわつさ酒にせう。コリヤ女房氣が付いた、徳兵衛には取分けて内儀の事を話さなやならぬ。九郎兵衛にも安堵させ。サアまあ奥へ先に立ち、ごりや内儀の御馳志を、食べて行のか徳兵衛は、件なひ一間に入りける。跡に九郎兵衛立止り、詞お内儀。琴浦殿や磯殿が見えぬが、ごこへいかれたか。さればいな、ごうやらそぶ／＼いふに依つて、お辰さんに預け、磯様は備中へ遣り、琴浦様はたつた今お前の方から迎ひに来た。ソリヤ誰が、ハテ親仁様が見えて九郎兵衛が、いひまする、四五日戻して下されま駕籠持たして迎ひにお出で。ヤアヤアあの、此九郎兵衛が云ふさいふて舅の親仁が連れて行んだか。チイノシテ／＼其駕籠はごつちへ。たしか南の方へ。夫遣つてはご駈出すを、コレ待つた氣遣ひな。詞迎ひに来た事お前は知らずか、知つた知らぬは後の事。イヤ夫聞かぬ中は、エ、面倒なさはれさばし、舅の跡を九郎兵衛は、息をはかりに、三重追ひかくる

(日本) 長町裏の殿

神と佛を荷ひ物はやし立たる下寺町高津宮の賑に紛れて急ぐ舅義平次かこの簾を細引でくる／＼巻の俄網追立行を後よりもチ、イ、呼びかけ飛くる聲の九郎兵衛なむ三寶も横切れにあせ道行けば追つじきかこの棒つかんで鼻中どうと打すへびつかとすわりほつと一息つきあへすコレ申親仁さまこの女中は知つての通り恩有る方からの預り人それをこなたむ、こ、連れてござるこれやてつきりご悪者に頼れ金にする氣で有ふがそふしられてはこの九郎兵衛も顔が立ぬわるいぞへ、此中も内本町の

道具屋で田舎侍に出立御番儘を以て五拾兩のかたりをへエ、見さげ果た重てきつごさいふてからが嗜む心も有まいコレ駕の衆太儀ながら其駕後へ戻してご昇上さすればコリヤ待て九郎兵衛嗜む心も有るまい見さげ果たさは忝い其あいそづかしを待て居たはい六年このかたおれも娘を女房にして慰者にしてあるサア揚代もらふヤイ愛な恩しらずめ儂は元宿なし團七さいふて粹方仲間の小あるき貫喰で暮しておつたを引上げて堺の濱で魚賣りさせまだ其上に娘のおかちをて／＼くり市松さいふ子迄へり出さしおつた。月々のあてむい取るがよさ

目を眠つて居る中乳守の町で喧嘩仕出し和泉の牢へかまつて百日の上女房子をたむ養ふたご思ふサア夫は皆其元様のお世話ぬかすな。せめて其入り目を入合そふと思ふてもうけ事にかゝれば備れも道具屋の内におつてよふほく上さしたなアイヤ夫は其場のつゐ。まだぬかすかけふ琴浦をちよるまかしてきたのは惚れて居らるゝ佐賀右衛門殿へ渡し金にする氣イヤサ夫では顔も立ぬか、アノな／＼おごごいを養ふてゐた此此此顔が立ぬか但しこちらの此、此、此ほうげた立ぬか足跡にはつたさけられても舅は親と無念を懲へ齒を



菅原傳授手習鑑

松王首實檢の段

松王首實檢の段

中 豊竹 和泉太夫
 (豊) 鶴澤 綱右衛門
 切 竹本 大隅太夫
 鶴澤 道八

人形

女房 戸浪 吉田扇太郎
 女房 千代 吉田文五郎
 作小 太郎 桐竹紋司
 菅秀 才 吉田文二郎
 下男 三助 吉田文之助
 武部 源藏 吉田玉次郎
 舍人 松王丸 吉田榮三
 春藤 玄蕃 吉田玉松
 御臺 所 吉田玉七
 滝 くり 吉田玉徳
 手習 兒 大ぜい
 百 姓 大ぜい

この淨瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作でこの「寺子屋」は竹田出雲の作と傳へられてゐます。初演當時竹本座はこの淨瑠璃で異常な盛況を見翌年三月迄大入續であつたといふ名作です。この段の内容を申し上げます。菅公の御世繼菅秀才は芹生の里に寺子屋を開いてゐる武部源藏が我子の如くにして圍まつてゐます。源藏は今の妻月浪と戀に落ちそのために菅公のお節を勘當になつたのであるが菅公にその才能を惜しまれて、筆法傳授

を受けた大恩は一身を暗しても忘れなかつたのです。この菅秀才のこそがいつか時平公の耳に入り、その首打つて渡せこの嚴命をうけて源藏はこぼろ／＼と我家へ歸つて見るこ一人今日入門した惻かな子供があつた夫婦はお主のためには代えられぬその子の首を打つて身替りに立てた檢視の役は松王丸でありました。病にまぎらして咽ぶのも道理でその首の子は現在の我子、女房の千代と謀つてお主のため我子を犠牲に身替りに立てたのでありました。松王丸の本心も見え、菅秀才は御臺と共に河内國へ落ちて行かれるさいふのわずか哀音迫るいろは歌の野邊の送りに誰か臉にも涙を宿す親子恩愛の純情美が流れてゐます。

(床本) 寺子屋の段

一字千金二千金、三千世界の寶そと教へる人に習ふ子の、中に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者、いたはりかしづき我子ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所替、子供集めて讀書の、器用不器用清書を、顔に書く子と手に書く子、人形書く子は頭かく、教へる人は取分けて、世話をかくぞと見えにける。中に年かさ五作も息子詞コレ皆これ見や、お師匠様の留守の間に、手習するは大きな損、おりや坊主頭の清書したと、見せるは十五の滝くり、若君はおさなしく詞一日に一字まなべ、三百六十字この教へ、そんな事書かず共、

本の清書したがよいと、八つになる子に叱られて、エ、ませよ／＼と指さして、嘲戯かゝるを残りの子供詞兄弟子に口過す、滝くりめをいじめてやご、手手に壓尺ふり廻す自然天然肩持つも、傳ふる筆の威徳かや、主の女房奥より立出で詞又コリヤ例のいさかひか、おさましや／＼今日に限つて連合の源藏殿、振舞に往てなれば戻りもしれぬ。ほんに／＼こなた衆で一時の間も待かれる今日は取分け寺入もある筈、畫からは休まず程に、皆精出して習ふた／＼ソリヤ又嬉しや休みぢやと、筆より先に讀聲高く詞いろはに、此中は御人被下、一筆啓上候べく、男の肩に堺重、文庫机を荷はせて、

の歩みで歸りしが、天道のひかへつ
よきにや詞あての寺入の子を見れば、
萬更鳥を鷲とも云はれぬ器量、一旦
身がはりて敷き、此場さへ遁れたら
ば、直に河内へお供する思案、今暫
くが大事の場所と、語れば女房、待
んせや其松王と云ふ奴は三つ子の内
の悪者、若君の顔はよう見知つて居
るぞへ、サアそこが一かばちか、生
顔と死顔は相好の變る物、面ざし似
たる小太郎が首、よもや置こは思ふ
まじ、よし又それさあらはれたらば
松王めを眞二つ、残る奴置切つて捨
て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途
の御供と、胸をすみたか一つの難儀
今にも小太郎が母親迎ひに來たらば
なんこそん、此義に當惑、さし當つ
たは此難儀詞イヤ其事は氣づかひあ

るな、女同士の口先で、ちよぼくさ
敷して見よ。イヤ其手ではゆくまい
大事は小事より顯るゝ、ここによつ
たら母諸共。エ、イヤこりややい、
若君には替へられぬ、お主の爲を辨
へよと、云ふに胸すゑ、さうでござ
んす、氣よはふては仕損ぜん、鬼に
なつてさ夫婦は突立ち、互に顔を見
合せて詞でしこ云へば我子も同然
サア今日に限つて寺入したは、あの
子が業か、母御の因果か、報ひはこ
ちの火の車、追付け廻つて來ませう
と、妻が敷けば夫も目をすり、せま
じき物は宮仕へと、俱に涙にくれ居
たる。斯る所へ春藤玄蕃、首見る役
は松王丸、病苦を助くる駕乗物、門
口にかき据れば、跡には大勢村の者
つきしたがふて申上げます詞告これ

に在る者の子供が、手習ひに參つて
居ります、若取達へ首討れては取返
しむなりませぬ、ごうぞお戻し下さ
れと願へば玄蕃、ヤアかましい蠅
虫めら詞うぬらむ伴の事迄、身共が
知つた事が、勝手次第に連失うと、
叱りつければ松王丸、ヤレお待ちな
れ暫くご駕より出るも刀を杖、憚り
ながら彼等迎も油断はならぬ、病中
なむら拙者めが見分の役務むるも、
今日に菅秀才の顔見知りし者なき故、
御暇下さるべしと、難有き御意の趣
き、疎かにはいたされず菅相丞の
所縁の者、此村に置くからは、百姓
共もぐるになつて銘々が伴に仕立て
助けて歸へる手もある事、コリヤや
い百姓めら、さへさぬかきす共

一人宛呼の世也、面あらためて見し
てくりよと、のつ引よとせぬ釘鏡
打てば響けの内には夫婦、兼て覺悟
も今更に、胸轟かす計りなり。表は
それとも白髪親仁、門口より聲高
に、長松よ〜と呼出せば、オツと
答へて出てくるは腕白顔に墨べつた
り、似ても似つかぬ雪と墨、之れで
はないと許しやる詞岩松は居ぬかと
呼ぶ聲に祖父様、なんぢやとばしこ
くて出て來る子供のごわんぜんき、
顔は丸顔木みしり茄子、詮議に及ば
ぬ連うせうと、にらみ付けられ、オ
いこわや 詞嫁にもくばさぬ此孫を、
命の花落のむれしと、祖父が抱へて
走り行く。次は十五の襷くり、ぼん
よ〜と親仁が手招き詞さよおれ
はモリ爰かう拖れていのと、甘へる

腕は馴れて、驚きり〜、泣
な、抱いてやらうと干鉢を猫で親
かくはへ行く詞私同伴は器量よし、
お見達へ下さるなと、斷り云ふて呼
び出すは、色白く瓜實顔、こいつ
胡亂と引さらへ、見れば首筋眞黒々
々、墨かあざかはしられども、こい
つでないと突放す、其外山家、奥在
所の子供残らず呼出して、見せても
見せても似ぬこそ道理、土も産した
計り、子ばかりよつて立歸る。スハ
身の上と源藏も、妻の戸返も胴をす
ゑ、待つま程なく入來る兩人詞ヤア
源藏、此玄蕃が目の前で討つて渡そ
と請合ふた、菅秀才も首サア請取ら
う早く渡せと手詰の催促、ちつとも
憶せず詞か初ならぬ右大臣の若君
かき首、れち首にもいたされず、暫

くは御川端と並出るを松王丸計りヤア
其手はくはぬ、暫しの用捨さひまど
らせ通仕度しても、裏道へは數百人
を付け置き、蟻の這出る所もない、
生顔と死顔は相好がかわるなと、
身代の髻首それもたべぬ、古手な事
して後悔すなと云はれて、ぐつこせ
き上げ詞ヤア入らざる馬鹿念、病ほ
うけた汝が眼玉がでんぐり返り、逆
様眼で見やうはしらす、紛れもなき
菅秀才の首追付け見せう。オ、その
舌の根の乾かぬ内に早く討て、そく
切れと玄蕃が權柄、ハツと計りに源
藏は胸をすてぞ入にける。傍に聞
き居る女房は、爰ぞ大事之心も空、
檢使は四方八方に、眼を配る中にも
松王、机文庫の數を見廻し詞ヤア合
點のいかぬ、先達つて行んだ餓鬼等

は以上八人、机の数が一脚多い、其
 俵はごに居るぞと、見咎められて
 戸浪はばつこ詞イヤこりやけふ初め
 て寺、イヤ寺参りした子がござんす
 何馬鹿な。オ、それ、是が即ち、
 菅秀才の、お机文庫と、生地を隠し
 た塗机、ごつごさばいて言ひ抜ける
 詞何にもせよ隙ごらすが油断の元と
 玄蕃詰共つツ立上る。こなたは手詰
 の命の瀬戸際、奥にばつたり首打つ
 首、はつこ女房胸を抱き、ふん込む
 足も、けしこむ内、武部源藏白臺に
 首桶乗せてしづ／＼出で、目通りに
 さし置き、詞是非に及ばず菅秀才の御
 首、討奉る、云は、大切な御首
 性根をすみてサア松王丸、しつかり
 と檢かせよと、忍びの鏝元くつろげ
 て、盧と云は、切付けん、實と云は
 い助けんと堅唾を呑んでひかえ居る
 ハ、い、い、何んのこれしきに性根
 所か、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か
 金札か、地獄極樂の境、家來衆、源
 藏夫婦を取巻きめされ、かしこまつ
 たご捕手の人數十手ふつご立かする
 女房戸浪も身をかため、夫はもこよ
 り一生懸命、サア實檢せよ檢分と云
 ふ一言も命わけ、うしるは捕手、向
 ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰
 ぞ絶対絶命と、思ふ内早や首桶引寄
 せ、ふた引きあげた首は小太郎、實
 と云ふたら一討ちと、早抜きかける
 戸浪は祈願、天道様、佛神様あはれ
 み給へと女の念力、眼力光らす松王
 が、ためつ、すむめつ窺ひ見て詞ム
 ウコリヤ菅秀才の首打つたは、まが
 ひなし、相違なしと、云ふに悔り涙
 りますか、わるきをお頼み申します
 ごに居るぞお邪魔であらうと、
 云ふを幸ひ詞イヤ奥に子供と遊んで
 るます、連立つて歸られよと、眞顔
 で云へば、詞オそんなら連れて歸りま
 しまと、すつと通るを後より、只一
 討ち切付くる、女もしれ者ひつげづ
 し、逃げてと途さね源藏も、及する
 ごとに切付くるを、我子の文庫ではつ
 しこうけ止め詞コレ待つた待たんせ
 コリヤどうちやと、剣る及も用捨な
 く、又切付くる文庫は二つ、中より
 ばらりこ經帷子、南無阿彌陀佛の六
 字の旗、あらはれ出しはコハいかに
 こ、不思議の思ひに叙もなまり、す
 みかかれてぞ見えにける。小太郎が
 母浪ながら詞若君菅秀才のお身もば
 り、お役に立て、下さつたか、また

蔵夫婦、あたりきまらる／＼見あはせ
 り。檢使の玄蕃は見分の詞證據に、
 出かした／＼よく打つた褒美にば
 かくまふた科ゆるしてくれる、イヤ
 松王丸片時も早く時平公へお目にか
 けん、いかさま、隙ごつてはお咎め
 もいかい、拙者はこれよりおいこま
 たまはり、病氣保養いたしたし、オ
 い役目はすんだ、勝手にせよと、首
 受取り、玄蕃は館へ松王は、駕にゆ
 られて立歸る。夫婦は門の戸びつし
 やりしめ、ものを得云はず、青息
 吐息、五色の息を一時に、はつこ吹
 出す計りなり、胸なでおろし、源藏
 は、天を拜し、地を拜し詞ハア、難
 有や忝けなや、凡人ならぬ我君の、
 御聖徳が顯はれて、松王めの眼が
 すみ、若君と見定めて歸つたは、天
 か様子が聞きたいと、云ふに解り詞
 シテ／＼それは得心か。得心なりや
 こそ此經帷子に六字の旗、ムウシテ
 其許は何人の御内證と、尋る内に門
 口より詞梅は飛び櫻はかゝる世の中
 に、なにきて松はつれなかるらん、
 女房悦べ、俵はお役に立つたぞと、
 聞くよりわつとせき上げて、前後不
 覺に取亂す、ヤア未練者めと叱りつ
 け、すつと通るは松王丸、見るに夫
 婦は二度悔り、夢か現か夫婦か、
 呆れて言葉もなかりしが、武部源藏
 威儀を正し詞一禮ばます跡の事、こ
 れまで敵ご思ひし松王、打つて變つ
 た所存はいかに、いぶかしさよ尋
 ねれば、オ、御不審尤、存知の通
 り我々兄弟三人は、めい／＼に別れ
 て奉公、情なや此松王は時平公に從

ひ親兄弟ごも、肉縁切り、御恩請けたる菅相丞様へ敵對、主命ごは云ひ乍ら皆これ此身の因果、何ごぞ主従の縁切らんご作病かまへいごまの願ひ、菅秀才の首見たらば、暇やらんご今日の役目、よもや貴殿は討ちばせまい、なれごも身がはりに立つべき一子なくんばいかせせん、爰ぞ御恩の報する時ぞ、女房千代ご云ひ合せ二人の中の倅をば、先へ廻して此の身替り詞机の敷を改めしも、我子は來たかご心のめご、菅相丞には我性根を見込み給ひ、何さて松のつれなからうごその御歌を、松はつれないくご、世上の口にかゝる悔しさご、推量あれ源藏殿、倅がななくばいつ迄も、人でなしご云はれんに、持つべきものは子なるごやご、云ふ

に女房猶せき上げ、草葉のかげで小太郎が、聞いて嬉しう思ひましょ詞もつべきものは子なるごは、あの子が爲によい手向、思へば最前別れた時、いつにない跡追ふたを、叱つた時の其の悲しさ、冥途の旅へ寺入ご早由がしらせたか、隣村へ行くご云ふて、道までいんで見たれ共、子を殺さしにおこして置いて、ごうまあ内へいなるものぞ、死顔なりごも今一度見たさに、未練ご笑ふて下さんすな、包みし祝儀はあの子が香奠四十九日の蒸物まで持つて寺入さすご云ふ、悲しい事ご世にあらうか、育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子は媚よしご、美しう生れたが、かあいやその身の不仕合せ、何の因果に袍齋まで、仕舞

ふた事ぢやごせき上げて、かつげご伏して泣きければ、俱に悲しむ戸涙は立寄り詞最前にナ、連合の身がはりご思ひ付いた筈へいて、お師匠様今から頼み上げますご、云ふた時の事思ひ出せば、他人の私さへ骨身が碎ける、親御の身ではお道理ご、涙添れば、イヤこれ御内證、コリヤ女房もなんではへる、覺悟した御身がはり、内で存分はへたでないか、御夫婦の手前もある、イヤ何源藏殿、申付けてはおこしたれ共、定めて最後の節、未練な死を致したてごさらう。イヤ若君菅秀才の御身替りご云ひ聞かしたれば、いさぎよう首さしのべ。アノ遅げ隠れもいたさずにナ。につこりご笑ふて。ムー

口な奴、利發な奴、けな氣な八つや九つで、親に代つて恩送り、お役に立つは孝行者、手柄者ご思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立し、嗚や、草葉のかげよりも、うらやましかる、けなりかる、倅も事を思ふに付け、思ひ出さるくご、流石同腹同性を、忘れられたる悲歎の涙詞のう其の伯父御に小太郎ご、逢ひますわいのご取付て、わつご計に泣き洗む、歎きもれて菅秀才、一間の内より立出で給ひ、我に代るごしるならば、此悲しみはさせまいに、可愛の者やご御袖を、しぼり給へば夫婦はつご、俱にひたすら難有涙、次手乍らに若君様に御みやげ

と、松王つゝ立ち詞申付けた用意の乗物、早くくご呼ばるにぞ、ハッご答へて家來共、お目通りにかきすゆる。ハア御出で戸を開けば、昔相丞の御臺所、ノッ母様か我子かご、御親子不思議の御對面、源藏夫婦横手を打ち詞方々ご御行衛尋れしに、いづくにか御座なされし。サレバく北睦暇の御隠れ家、時平の家來も聞き出し召捕りにむかふご聞きそれかし山伏の姿ごなり、危い所奪ひ取つたり、急ぎ河内の國へお供なされ、姫君にも御對面、コリヤく女房詞ご小太郎が死骸あの乗物へうつし入れ、野邊の送りいごなまん。アイご返事のうちに、戸涙ご心得抱いてくる、死骸を綱代の乗物へ、乗せ

て夫婦が上着をよれば、あはれや前より覺悟の用意、下に白無垢麻上下心を察して源藏夫婦詞野邊の送りに親の身で子を送る法はなし、我々夫婦が代らんご、立寄れば松王丸詞イヤくこれは我子にあらず、菅秀才の亡体をお供申す、いづれもは、門火門火ご門火をたのみ頼まる、御臺若君諸共に、しやくり上たる御涙冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く子をあへなくも、ちりぬる命是非もなやあすの夜誰か添乳せん、らむうのめ見る親心合つご死出の山けこえ合あさきゆめみし心地して、跡は門火に及ひもせず、京は故郷ご立別れ、鳥邊野さして連歸る。



平太郎住家の段

前 竹本 南部 大夫
野澤 吉 彌
豊竹 島 大夫
鶴澤 芳 之 助
後 鶴澤 友 造

人形

お 柳 桐竹 紋十 郎
線 丸 吉田 榮三 郎
平 太郎 吉田 小 兵 吉
横 根 平 太郎 桐 竹 政 龜
進 藤 藏 人 吉 田 玉 七
和 田 四 郎 足 吉 田 玉 幸
人 足 大 吉 田 玉 幸

次 卅三間堂棟由來

平太郎住家の段

寶曆十年十二月豊竹座上演の「福園女御九重鏡」の三段目がこの柳のお柳の件で「卅三間堂棟由來」の原作になつてゐます。作者は若竹笛師中村阿契の合作です。織込まれたる内容を申上げますと、白河法皇が御腦を病ひ給ふ原因は院の御前見たる熊野の蓮花房といふ高僧の鬪體が岩田川の水底に沈みそれが岸の柳の根のもさに埋もれてゐるため柳の木が風にそよぐまに御惱になるさいふ神僧のお告げに法皇は直ちに北面の武士横骨根光當に院宣を賜はつて鬪體の詮議と蓮花王院即ち卅三間堂

建立の用材切り出しを命じ給ひました。ところが横骨根の同役で腹黒い岩淵時澄は彼を不首尾に陥らせ自ら奉行の役を奪つて熊野へ下りました。光當は功成らぬを恥ぢて切腹して果てます。一子平太郎は瀧本の庄司の娘お柳と契つて線丸と呼ぶ一子を生けました。お柳は實は平太郎に助けられた柳の大木の精の化体であつたのです。卅三間堂の棟の用材にこの柳の大木が切り出される事になり老木は伐り倒され根元から鬪體も掘り出されました。木遣り音頭勇ましく曳かれて行く柳の大木がその途中で動かなくりました。お柳丸が音頭を取つて手をかけるも易々曳かれて行つたさいふ草木成佛に終る親子の恩愛を現はした京は卅三間堂棟の由來

傳説を新した名曲で御座ぬます。(木本) 平太郎住家の段

M 夢やむすぶらん。妻は傍りを立退いて、奥を覗いて立戻り、おづおづ傍へ立寄つて、ゆり起せども夫は寢付の高軀、風も持てくる斧の音、伐木さうく〜てう〜と、木を伐音やこたへけん。お柳は身内の苦しみを、じつところへて立寄れど、得も岩代の結び松、我は柳の線子が、顔を眺めつこつ置いつ、詞ヲ、それ互に顔を合せては、身の上語るも面はゆし、寢入給ふを幸ひに、今自云ひ残す、必ず夢と思はずに、白地も聞いてたべ。詞ノウ我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生育ち、かやうに夫婦と成る事も一方ならぬ因縁ぞや先の生にて誓たる、契りを結ばん其

の爲に、假に女の姿と變じ、柳の村に待受て、夫婦となりしも、五とせの、春や昔の春の頃。詞 季仲も鷹狩に、鷹の足緒のかかりし時、數多の武士に切崩され、既に枯なん此柳、其時に、お前が一矢の手柄、鷹を助けて葉柳の、枝に障りも、あれ〜、又もや爰にちりくる葉は、我を迎ひに来るかと思へばやる方詮方も、なく〜見やる足元へ、ちりくる柳の葉隠れや、亂る心押しづめ。詞 其時の情の恩、送る月日も重なりて、柳の花のコレ線丸。最早今年で五歳の春秋の重なれば、乳もなくも育つべし、成人の後々は、父の弓矢を請傳へ、潔い名を上げてたもや、ヤ、母は今を限にて、元の柳に返るぞや、必ず草木成佛さ、回向を

かけ寄る幼子、夫も涙の聲を上げ。詞非情の草木も云ながら、情有ればこそこれ迄に、睦じくも馴なじみ、一人の若を設し身が、何進ふり捨て歸りしぞ、せめては母を見送る迄、俱に介抱してくれよと、託ち歎げば漸々に、しほるゝ顔なふり上て。詞傳へ聞く安部の童子も母上も、丁度我身と同じ事、一人の子を残し置き信田の古柳に歸りしこや。夫は野干の年経る身、我は元來草木の、歸る古柳の柳は今、伐崩されて枯柳、歸るこいふは消ゆる身に、何逆形を残すべき、哀れも思し給はれよ。詞白河の法皇の御惱しきり連、都の使來たりつゝ、我身を切捨て申す也、もはや朽木も時を得て、一字の棟も成る事も、一つは成なる法の縁、佛果に

連し縁あれば、情の恩を報ぜん爲、一つの筐を参らするこ、平太郎が手に渡し。詞それこそ、白河の法皇の前出の御頭也、それを手柄に御身の上、再び出世をなし給へ、必々縁の事、お頼み申し参らす。詞エ、離れがたなや可愛やな。合あれ、風の音に連れ、柳の糸を切拂ふ、斧鉞がてうゝゝ、既ば爰に玉さける、時にそきたれいざらば、さらばぐの聲の下、姿は見えず成にけり。わつと計りに三人は、暗より暗に迷ひつゝ、互に手に手を取りかはし、前後不覺に嘆きしが、涙ながらに平太郎我子を膝に抱き上げ、詞なう母人、我よりは此者が愛着に引かされて、嗚や名残の惜からん、たさへ姿は見え共、柳は妻が

亡き儂、今一度此縁に、見せもし、我も見もしたし、藏人さやらんにも對面せん、母人には此鬘、佛間へ直し下さるべし某は今直に伴を連れて柳の元へ、チ、夫れくゝ一時も早う孫を連れて。ハ、ア、然らば直ぐさま、サア縁よ來いよ、我子の手を引き二足三足、深山隠れの山寺の、入相告ぐる鐘の音、合かぞへながらもそるゝこ、さぐる足も見付る母。詞これ平太郎、そなたは何ぞ仕やつたか。これば、様、こゝ様は目が見えぬいのウ。ヤア、そりやマアいつから。ハイさればで御座ります、一月餘り、ふも鷄目が發ました、女房に言ひ含め、是迄はお隠し申した。エ、聞えぬ平太郎、さういふ事ならさくよりわしにも。ア、コ

レ、何にもお漏ひなされるゝな、したがおまへ様にも此坊めも、今夜から嘸便りが。チ、折も折してそなたの眼病、猶更わしも力もない。ア、アレ、アレモアノ雪のふる事わいのマア火を燈しませうと行燈の灯を提燈に、うつし持つたる線丸、篋ま笠よと打着せて。詞そんならちよつと参つてさんじまじよ。オ、怪我せぬやうに、ソレ線よ、手を引けよ。あ

いゝゝ。あいろら見えぬ鷄目の父、杖も我子を力草、柳の本へまたどり行く。母は佛間の看經に、鉦も幽に六字誦、風も身にしむ黄昏過、心も鬼の和田四郎、晝の街の傘てより、夜は山賊の大膽不敵。何でも揃出しゝこためんも、大だら指足癩ひ足、きしつく疊の物音に。誰じや

飛しゝ、のつかのか、鬘を引出すた鬘籠、あたふた開て手にあたる親子が着かへに包んだ大小、鮫は鼠がまだ外に、御明上た釣なまへ、備へし鬘籠を見て、ごこやらぞ、髪立退しが、打點いてコリヤ婆よ、葛籠に刀があるから浪人に極つたが又あの鬘籠は何の爲じや、サアそれぬかせ、チ、あれはの、息子が出世する大事なものや。ム、何じや出世するか、其出世が猶耳寄じや、是や何者の鬘籠じや、サアぬかせ、ぬかさぬかやい、ぬかさや斯うちやと引抜くだんばら、目の先きへさし付くれば。詞ア、いゝゝゝたさへずたゝに切られても、言はぬゝヤアしぶさいおばれめ、骨をひしいで云はするま命もあら繩見付出し、

かんぢがらみにぐるぐ巻、見上ぐる燈籠の釣繩ほごき、結び付たる猿縛り。詞サアくぬかせく、こいふては引げる釣繩に、次第にしまる縛り繩、血筋赤らむ葛紅葉、命の憂ぞ危けれ。詞ばい、はもかくばく、情の強い根性から、痛い目を見をるわい、コリヤ下は滑の溜り池氷りの地獄じや、サアぬかせく、こ責せつてう。老母は苦しき聲も出す降くる雪に争ふ白髪、眼にしたふ血の涙、見やる向ふに提燈の、光りに悔りなむ三三、繩を放せば眞さか様水の溜りへおちこちの、むざん成ける次第也。遠がの四郎も狼狼眼、表へ逃人も一筋道、やり過して行かんづこ、庵の庭に身を忍ぶ。斯さはしらぬ平太郎案内はいつも我門に、常

燈明の光りさへ、提燈の灯に線丸。詞これさ様、佛様へこぼした行燈が落ちて有る。ヤアぞれく、ホンニコリや落ちて有る、不思議々々々門の口。詞母者人、申し、漸々今歸りました、母者人々々々、コレく線よ、母人は見えぬかあれく、こ様ば、様が池へはめて有るわいのヤアさ驚き走り寄りさぐり奪れる手先へ障る繩を力に親ま子か、漸々にかつぎ上げ。詞これく申し母者人何者が此様に、ばく様なふく、こいへご應へもあら悲しや、体は氷さ冷切つたり。こりや何させう、どうせいご、かけ出してはかけ戻り、立たりぬたり氣は半亂。詞エ、く目も明きたい開きたい。親目は何の因果ぞ、母に取付き身をもたへ、聲を

ばかりに嘆きしか。詞ハツアさうじや、水に溺れし体には、藁を焚いて温むれば、再び息を返すぞ聞く、チそれよそれよご父親が、指圖に藁をかき集め、蠟燭の灯を指寄て、心を焦す知さへ、親子が心通じけん、うごめく体に猶も口寄。詞コレお心遣に、母人様々々々々聲を限りに呼び生る。漸々に目をひらき。詞チ、平太郎。孫もそこにか。ハイく線も爰に居ります。お心も付ましたか、モ何奴が此所爲。チ、何者さば暁來たやつか。扱は街で有つたるよな。シテくごつちへうせました。ア、コレく平太郎、母が横死は定まる業、随分身をば大切に、曾根の苗氏を起しなば、之れに上越す悦びはない、随分親子長生して末の榮え

を見てたも、それが冥途の土産や、取分け不慮は孫の縁、今一度顔をか引きよせて、聲を限りのくごき言、可愛いや親には思はぬ別れ、辨へなき子心にも、さぞや便なう思ふで有る、可愛い者やいぢらしや、又一つには嫁お柳かあい、夫子をふり捨て、歸る柳は切り崩され、魂宙宇をうろく、魂家の棟放れずば、今一度姿をば見せても、くごき嘆けば平太郎、今日はいかなる悪日ぞ妻に別れ其の上に天にも地にもたつた一人の母人が、非業の別れば何事ぞ悔みの涙ばらく、かゝる憂目を三熊野の、那智のお山の瀧津瀬も一度に落ちくる如くなり。老母は今の聲の下。詞ノウ、平太郎、縁か

事な難むぞや、いふが親子の一世の別れ、はかなく息は絶えにけり。重る思ひに親ま子か前後ふかくに嘆きける。様子をさつくこ和田四郎、後に立てせいら笑ひ。詞ばい、くばいめはくたばる、爺めは眼がつぶれたな。さう云ふは晝うせた騙よな目前母の仇敵覺悟ひるげこいばせも立てず。コリヤやい、眼も見えぬ様を仕て、じたばたひろげば命もないぞよ、コリヤアノ調腰は出世の種もぬかすから、何者の體體じや有様にぬかせ、ぬかさにやうぬも小伴も、今目前に芋刺じや。ヤぬかしたり、うぬらも手に合ふ某ならず、コリヤく線よ、刀を奥で取つてくる、此手ちやつと引いてくれ、ヤい、其大小は引さらへ、爰におれも持つ

てある、これが欲しいか、ほしくばサアぬかせ、ぬかさよ是じやさひらめく又先、目先は見えぬ眞の闇。恐い、く線丸、送行く首筋引つかみ詞サア小びつちよからさいなもか但しはぬかすか、サアく、何ぞ人質取つたる手詰と手詰。詞エ、此目も明てほしいな南無無權現様々々々々々、お柳やい。ヤアやかましいわい、いつその事にこの小伴、芋刺にしてくれんご段平逆手にこりなほせば、アレエ、く泣く聲に、今はたへ兼ね、詞ア、コレ申ます何を隠さふあの體體ば、白河の法皇のこ半分聞いて。詞ム、よし、ついで一言ですむ事を、ソリヤ餓鬼をこますご扱やれば、親子が嬉しさ纏り寄り、溜息ほつさつく空に。合鳥の羽

音二聲三聲、雲間をさして飛んで行く。其隙に和田四郎、獨體を小脇にかけ込んで。詞白状ひろいだ褒美、是をくらへみ切り付くる。かい洗んで利腕しつかり、詞ゴリヤごうじや、いやうぬは眼も見えるかよ。オアレ〜蟻の這ふ迄見える不思議。ヤア〜
 切込む刀引つたり、池の深みへ頭轉側、尻引からげつゝ立たり。詞ヤア、まゝ様強ふ成つたの。チ、坊さゝ様はもう目も見えるぞよ、嬉しいか〜、何より大事なる御頭さ、しつかみ渡す、後の方、這上つたる和田四郎腕をかためて切込むを心得鐵にてしかご受留め、詞斯う目が明は百人力、盗人ふぜいの己等に、刀を當るは及の穢れ

うぬに似合ふた鐵の刃先、老母が敵観念せいで、打つてかゝるをはつしと受け、やあ盗人さば案内なり。詞季仲の謀反に組し、軍用金を集ふる爲、山賊夜盗は假の渡世、鹿島三郎義連なり、猿めらが命の宿かへ、一そつ首ならべんご、廣言たらん付入る早足。こなたも弓矢は手練の若者、請けつ流しつ切結ぶ、鎗を削るふっきの空、みぞれ交りの雨の脚、踏すれば踏留り、組づ轉んづ、三重いごみける、平太郎は多年の試、神や力を添ぬらん。切伏せ〜乗つかり、老母が敵うれしやま、親子は体踏み付け〜、嬉しさ限りなかりける。折からさつご冷風の身にしみん〜こしみ渡り親子は顔をふり上げれば影か有らぬか縁が母。


詞ノウ平太郎殿、御身多年の孝行と信心の功德に依り、月日の兩眼明らかに、忽ち敵を討たるも、大権現の神勅なり。肌守を見給へご、いふ聲ばかり聞ゆるにぞ、初めてはつご心付き誠にふしきは此兩眼、眼前敵を討つたるも、偏に神の加護なるかご、懐中の守りより、牛王取出しよく見れば、數多の鳥の影もなく。扱こそ大靈權現の、不思議みせしめたまふかや、ハア〜
 有がたし〜ご肝にめいする祈こそあれ、またも羽音は悦び鳥、飛連れ〜目の邊。披きし紙は忽ちに、元の牛王ご成にける。かゝる奇瑞を三熊野の、牛王の威徳末の世に、門戸に押して盗人を、ふせぐ守ぞ有がたき、早東雲の街道筋、木やり囃子で地車

の、轟く音ぞいさましや。合音頭、和歌の浦には名所が御座る、一に權現二に玉津島合三に下り松、四に鹽釜よ、ヨイ〜ヨイトナ。俄に車地に据り、えいや聲して人夫共、押せごも引げごも一寸も先へ行かぬぞふしぎなる。警固の武士進藏人、さわぐな者共思ひ當る事こそ有れ、せくな〜ご制する所へ、身拵へして平太郎、縁をつれて出迎ひ、詞扱こそ此木の動かぬは、目前親子恩愛の、別れをおしむご覺えたり。妻も靈をもいさめる爲、何卒綱を此作に、引かせて給はらば、有がたからんご願ふにぞ詞ホ〜さ〜そ〜某もさは存する所、左様ならば此柳、新宮の濱先迄、跡は海手を流さんご、錦の袋を手に渡し。詞御頭を是に

大及御池橋

茶筌


電話新町二番



松竹本各社副揚用達 秋替燈傘 大及南區酒類振興會

宇津屋

電話八七一番



往來ならぬ殿しいお觸れ、假令劍が手に入つても今夜中に届ける事も叶はれば、吉三様は矢張切腹。ハア悲しや是りや何とせう如何せうと立つたり居たり氣はをる、更け行く空の怨しく、鐘鳴る方を睨み付け、拳を握り齒をかめしめ、只うつこり立つたりしが、ふつと氣の付く表の火の見。チ、然うじや、アノ火の見の半鐘を打てば、出火と心得、町々の門を開くは定、思ひのまゝに劍を届け、夫の命助けいで置かうか鐘を打つたる此身の科、町々小路を引渡され、焼殺されても男故、少しも厭はぬ大事無い、思ふ男に別れては、所詮生きては居ぬ体、炭にもなれ灰ともなれと、女心の一筋に、帯引締めて裾引上げ、表に駆け出で、四辻に告むる人も嵐に凍て、雪は凍りて路滑る、合橋子は即ち劍の山、登る心は三悪道の通ひ道、杉は難なく奥の間より、

劍を盗んで逃げ来る跡、ヤイ大盗人めと駈来る武兵衛、引抱へて揚ぎ取る劍、遣らじと縋るを踏飛ばす、ごつこい然うはご取付く彌作。是や何ひるぐと太左衛門、引擦りつくるその手を直ぐに、腕掬みにこりやぐぐぐ、彼處は見下す雪の屋根、其儘三途の瓦葺、睨む地獄の鬼瓦、追立て責むる身の因果、廻りくるくぐぐぐ、下には四人も挑む中、お七は難無く火の見の上、撞木追取りちやんぐぐ、音より間も無く爰彼處、一度に打出す警鐘の、響きに連れて開く門々、嫌はれた意趣晴し、引縛つて訴人するご、お杉を蹴飛ばし上り来る、櫛子を下より打返せば、武兵衛は大地へ真逆様、持つたる脇差取落すを、杉は追取り吉三の方、駈け行く跡を追掛ける、太左衛門首筋はいなご、擔いで投げ込む用水桶、腰骨折つて蠢く武兵衛、お七も飛んで遠近の、人の囁き、三重なりにけり。

夏を忘る爽快なお芝居

正午と五時半開演

あなただの角座

四月ツ橋り
七月の文樂座
消息日誌

△七月一日

近來の大入に例を破つて七月興行上演の初日を開く。

△七月二日

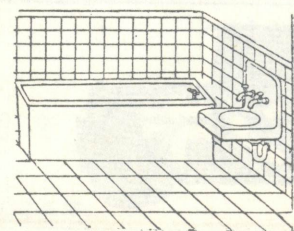
全關西の大學専門校の劇研究會の幹事二十餘氏のお集まりを希ひ、文樂人形淨瑠璃に就ての意見をお聞きしたところ見たい聴きたいが、今迄餘りかけ離れた營業政策を採られてゐたから其機會がなかつたのだこの隆々たる復興を期して全關西學生文樂後援會を組織して來る新秋新學期

△七月六日

より適宜の時時を利用して文樂を見る會を進めよふと協議一決して散會したが當日大塚支配人と舞臺裝置係の松田種次氏より文樂座の内容と學生との提携に就て繰々説明するところあつて學生諸氏の諒解を得たことは欣快に堪えないことです。

第二回人形淨瑠璃教育會マチネ開催、狂言は「加賀見山」の草履打より奥庭仕返し迄上演。教育家操狐界の方々三百五十名が來賓として見えられ非常の盛況を呈しました。當日の觀覽団体は御津婦人會、此花婦人會、神子田裁縫女學校、金蘭會女學校に神戸幼稚園等。

△七月六日



化粧タイムル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化装置
特許無臭便所

西區立寶堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
阪急夙川
岡部商會支店
電話新町一六二七九
電話西宮一九七六

阿部陸相代理閣下、林第四師團長の御案内で参謀長、高級副官等と共に御來觀。

文楽通で非常に人形の好きな陸相は貴賓席で人形を自ら採り記念撮影をせられ『朝顔話』を熱心に聴かれた。お土産の詞

として『せびこれだけは保存したいものだ』と感慨いさ深きものがあつた。

△七月六日

大阪方面委員の岡嶋様が知己要路の方々を御招待御一行二十餘名様にて郷土藝術の振興のために御觀覽おつこめ下さいました。

△七月十日

京都帝大工學部建築學教室より伊東助教援引率の下に十四名の學生諸氏が當座の

建築を内外諸機關に涉り研究の目的で見學せられた。

△七月十日

大阪朝日新聞社主催で朝日會館に大阪情景『夏祭展覧會』が開催されたに就て當座より『夏祭浪花鑑』の團七九郎兵衛と義平次の人形に南爪畑の義平次殺しの舞臺を出品しました。出品早々郷土の香り高き傑出した機構たご賞讃を博しました

△七月十一日

伊聖高濱虚子氏が巴里歸への御令息同伴にて來觀され氏の若き頃御靈へ通はれし時と隔世の感あるごいたく嘆賞され當座サインブックに麗筆を揮はれた。

△七月十三日

△七月廿日

伊太利東洋艦隊の参謀長以下六名の最高幹部が佛國領事館の谷氏の案内役で來觀白井社長と共に各々人形お七、おこん、静、三番叟等を操り記念撮影をし釋迦誕生會を見物して記念寫眞に微笑を殘し満足氣に次のプランへ赴かれた。

△七月廿日

例を破つた七月の本興行も暑熱の候に不拘連日盛況のうちに打上げました。御厚情を厚く感謝します。

大阪の夏を彩る陶器神社のお祭り、物町へ八月興行上演の『柳』の舞臺面を買物の人形で飾つて一倍の賑はひを呈した

△七月十四日

神戸高工建築科學生諸氏が當座の建築見學のため來觀された。通風換氣の設備にはいたく感心され樂屋其他劇場特殊の構造に就て究められるところもあつた。

△七月十七日

吉例のBKより舞臺中繼にて津太夫、友次郎の『吃又』を全國へ放送した。

△七月廿日

策四回マチネ開催。

料飲涼清級高最

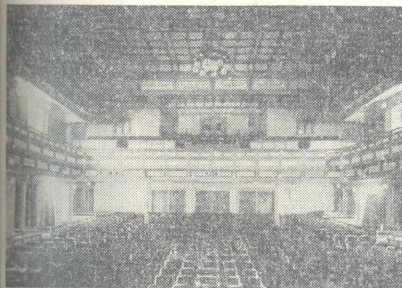
ンモレ・ドンモヤイダ

ンサンタ引布印蹄馬

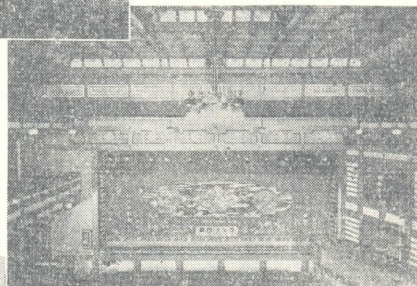


はり歸おの定指樂文でクタンキ

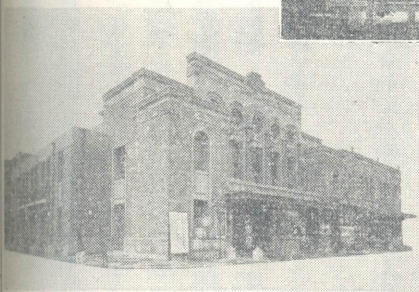
グ 文 四
ラ 樂 ツ
フ 座 橋



景全席覽観内場



む響を臺舞りと席覽観



景全観外座樂文



口入御席賓貴と所憩休面正階二

◇ 文樂座御ひのみき名簿募集 ◇

- 一、申込は必ず官製はがきの事。
- 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい
(御住所御芳名の他一切不要)
- 一、御ひのみき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。
- 一、會費其他一切申受けません。
- 一、宛名は大阪市西區四ツ橋 文樂座編輯部宛の事。

文樂座の歴史が全部
わかる唯一の文獻

「文樂今昔譚」 特價 金貳圓

楽しいグラフと興味
ある好談物月刊雜誌

道 頓 堀 一部 金三十錢

美しい原色版歌座劇
美しい文樂座の包装

文樂の繪葉書 一二枚 金十五錢

座王のユヴレとマホシ
備完の置装風冷と氣換



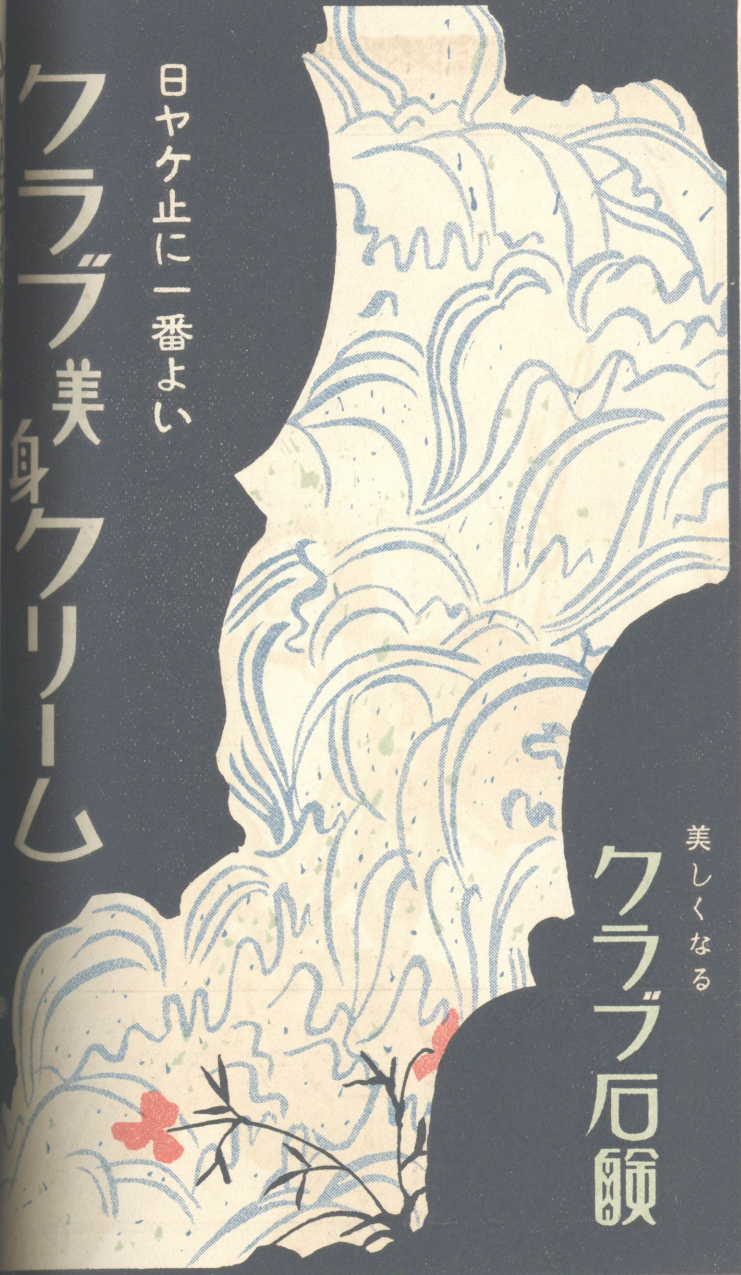
座 竹 松 期頓道



人形浄瑠璃

クラブ美身クリーム

日ヤケ止に一番よい



美しくなる

クラブ石鹸

文楽座

橋っ四